

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

庭山 雄吉

【所属】(助成決定時)

東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻博士課程単位取得満期退学

【研究題目】

「カナダから日本へ転住した日系人の文化変容」

【研究の目的】(400字程度)

本研究の目的は、第二次世界大戦後、カナダ政府による政策により、カナダから日本へ転住した日系人の文化変容を明らかにするものである。第二次世界大戦中、日系カナダ人は敵性外国人としてみなされ、約22,000人が強制移住の対象となり、抑留キャンプで約4年間隔離された。第二次世界大戦が終わりを迎える頃、カナダ政府は、日系カナダ人に対して「忠誠審査」を実施した。カナダへの忠誠を示す者は、カナダ東部へ移住しなければならなかった。たとえ、カナダへ忠誠を示したとしても、日系カナダ人にとっては生まれ育った西海岸へは戻れないため、過酷な選択となった。忠誠を示せない者は、日本への転住（一世については送還となる）という選択肢しか与えられず、最終的に3,964人の日系カナダ人が日本へ転住した。その後、約半数がカナダへの帰国を果たし、残る人々は日本での定住を決断した。現在、生存者の数は非常に限られている。本研究の実施により、生存者から得られる証言は貴重な資料となり、深化した研究領域を開拓することが可能となる。

【研究の内容・方法】(800字程度)

基本的には、聞き取り調査を主体とするが、ライフ・ヒストリーにのみ傾斜することなく、日本の戦後史、カナダの戦後史についても視野に入れ研究をすすめる。調査者は日本に定住を決意した人とカナダへの帰還を決意した人に対して半構造化インタビュー方式を採用し、一対一の面接調査を実施する。その後の整理の過程での追加的質問については、質問状を送付し回答を求めていく。特に、本研究の主要な核となるそれぞれの決断（日本での定住あるいはカナダへの帰国）に至る過程に焦点をあて、時代考証をも含め詳細にそれぞれの文化変容を考察する。

日本での定住者を対象にした面接調査にかんしては、現在の段階で所在が確認できている広島県に在住するカナダから日本へ転住した日系人に対して聞き取り調査を行う。質問項目は、抑留キャンプでの生活、日本へ来た時の心理状態、戦後の日本での生活を主要な調査項目とする。カナダ生まれでカナダで教育を受けた日系カナダ人が、国家的政策により日本へ転住しなければならなかった訳であるが、彼／彼女等がカナダへの帰国を断念し、なぜ日本で定住する決断に至ったのか。それは、カナダとの決別であったのか、それとも日本人として生きる決意だったのか。その理由、背景、経緯について詳細に調査をすすめ、決定的要因を探る。

カナダへの帰国者を対象とする面接調査では、ヴァンクーヴァー市およびその周辺都市に在住する日系人を対象とする。国家政策により抑留キャンプに隔離され、さらに日本へ転住を余儀なくされ翻弄されたにもかかわらず、なぜ、カナダへの帰国を決意したのかという点に集中して聞き取り調査を行う。具体的には、帰国後のカナダでの順応性や就職等、カナダの社会環境の中でどのようにして文化変容を遂げ今日に至ったのかを調査する。

最終的に個々のインタビュー調査を総括し、それぞれの日系人の文化変容の過程を整理することで、マイノリティ集団の中のさらにマイノリティに属する人々の声なき声を明らかにすることで日系カナダ人史に新たな一石を投じる。

【結論・考察】（４００字程度）

本研究において、カナダへの帰還を決断した A 氏（男性）と日本への定住を決断した B 氏（女性）を対象に半構造化形式でのインタビュー調査を行った。A 氏にかんしては、日本へ転住して以来、カナダへ帰還したい願望を抱いていた。さらに日本で結婚した配偶者（日本人）がカナダでの生活を望んでいたということもカナダへの帰還の要因の一つであったことが判明した。B 氏にかんしては、カナダへ戻りたいという願望もあった反面、広島で入学したミッションスクールの環境が良く、いわば B 氏にとっての安全地帯になっていたと言える。その後、B 氏は母校での教員となり日本での生活が落ち着くことになるが、現在においてもカナダ国籍を保持している。両者とも現在、居住する国は異なるが、現在においてもカナダと日本の両方に精神的アイデンティティを有していることが明らかになった。極めて数の少ない生存者から証言を得られたことは貴重であり、今後の研究に活かしていきたいと考える。